

## 滝田栄さん講演会

# 「家康公が教えてくれたこと」

静岡商工会議所は2013年11月28日、静岡商工会議所会館5階で、1983年のNHK大河ドラマ「徳川家康」で家康役を演じた滝田栄さんの講演会を開催しました。その内容の一部を紹介します。

(文責・企画広報室)



写真・望月英克

静岡は、僕の現在に至る新しい魂の生まれたところだと思っています。僕が徳川家康を演じたのは30年前です。

19歳の時に俳優になることを思い立ち、生きるということは素晴らしいことだというメッセージを伝えられるような俳優になりたいと、ずっと思っていました。文学座の養成所に入って、10年間の修業を経た後に出演したNHKのドラマを本気で演じると、次々と仕事が入るようになり、33歳の時、大河ドラマ「徳川家康」の家康役を演じてほしいという連絡が入ったのです。

### 家康の最初の印象は、格好が悪い

何冊か出来あがった小山内美江子さんの台本と原作と様々な資料が送られてきて、役づくりに入ったのですが、それまでは、どんな役でも一度台本を読めば、心の中を読み取ることができました。信長、秀吉、武田信玄、今川義元、ほかの武将については手に取るように心の中が分かるのですが、家康だけは読めば読むほど分からない。最初の印象は、みつともないくらい格好が悪い。大河の主役と聞いた瞬間、見た目の英雄を演じたくなくなっていたのです。本当の人間の心理を見抜く目がつぶれていたのです。

家康が分からないと、演じられませんかから、NHKのチーフプロデューサーに会いに行くと、「滝田くん、僕たちは、長く続いた戦国という悲劇の時代をついに終わらせた巨人・徳川家康の魂の歴史の物語をこれから始めようとしているのだ。その魂を演じることができれば、キミしかない」と口説かれて、立ち直って、家に帰ってシナリオを読み始め

ると、相変わらず分からない。

### 家康は、臨濟寺で何を学んだか

そこで、山岡荘八先生の原作をもう一度読んでいかに読み始めたのです。そうしたところ、家康が竹千代と呼ばれた少年時代、駿府の今川義元の参謀の太原雪齋禪師というお坊さんに預けられて、様々なことを学んだらしい。7歳、19歳という人間が形づくられていく一番大事な時に、家康は臨濟寺で何か大変なことを学んでいるのではないかと気づいたのです。

臨濟寺に電話して「しばらく寺に滞在して、役づくりをしたい」とお願いすると、「臨濟寺は、全国の禅の道場の中でも特に厳しいことで有名で、一般の方の修業は無理です」との答え。「ここには本當の教えが生きているぞ」と感じて、重ねてお願いし、受け入れていただきました。

横のくぐり戸から一歩入った瞬間、「来て良かった」と思いました。俗界と違う澄み切った空気がみなぎっていました。僕の心が緊張していたせいかもしれませんが、戦国の命がけの世界を感じることでできました。竹千代が走り回ったであろう庭を踏みしめながら本堂に行くと、親切に迎えてくださり、朝の境内の掃除と3回の食事を修行僧と一緒に、部屋で勉強することになりました。

感謝の気持ちを通じてから食事をすること、家康が食べることは大切さを感じました。長寿を全うしたことは分かりましたが、相変わらず、家康が何を学んだのか分からない。

### 苦の連続だった家康の人生

庭の掃除を終えて本堂に戻ると、倉内松堂老師が玄閑に待つておられて「勉強は進みましたか」と聞いてくれました。僕が追い詰められていることを話すと、お茶に呼んでくださいました。

お湯をゆつくり冷まして、杯のような茶碗に数滴しぼり出した最初の一杯をいただく、甘み、うまみが全身に広がりました。二杯目は随分渋い。三杯目は随分苦い。「甘渋苦、三杯そろって人生の味わい」と教えていただきました。

家康の人生は、甘もなく、渋もなく、僕だったら耐えられない苦の連続。すごい人生だったのだな。普通の人では越えられない試練を、苦しみながら越えて、誰も止められなくなった戦国という悲劇の時代に終止符を打った。格好悪くていいのだ。試練を苦しみながら越えていくところに、家康のドラマがあるのだと、初めて分かったのです。

老師は、お釈迦様が亡くなり、命あるものがみんな泣いている「涅槃図」を見せて、「どうして泣いていると思うかね」と聞くのです。「生物は弱肉強食の歴史を繰り返してきた。お釈迦様は、どこにも安心がないことに気づいて、苦業の旅に出て、ついに悟られて、消えることのない幸福を手に入れられ、すべての命あるものが幸福に至る道を示してくれた。そのお釈迦様が亡くなったので、悲しいのだ。雪齋禪師は、竹千代に涅槃図を示して、すべての人が別れを惜しむ、お釈迦様のよいうな武将になりなさいと教えたと思うのだが」と老師は言いました。家康の本はこれだと確信して、寺を出ました。